

## 積雪期の札幌市におけるギンムクドリ (*Sturnus sericeus*)

### の観察記録 (2009 ~ 2010 年)

泉敏彦

北海道立衛生研究所 健康科学部 飲料水衛生科 〒060-0913 札幌市北区北19条西12丁目

#### はじめに

札幌市において、2009年及び2010年の連続2回、厳冬期の積雪期にそれぞれ約2週間に渡って滞在したギンムクドリ (*Sturnus sericeus*) 1羽 (♂) を観察した。本来、主として中国南東部周辺に生息するギンムクドリが我が国で観察された事例については、近年、南西諸島や奄美大島で定期的な越冬が確認されており、本州でも西日本を中心に旅鳥として飛来することが報告されているが、全体としてはまだあまり多くの観察記録はない (平田 2010)。ギンムクドリは非常に活発な上、極めて警戒心が強く、更に今回の観察条件にも制約があったものの、比較的長時間に渡り当地に滞在し、至近距離からその行動を観察することができ、更に、記録写真も多数撮影することができたため、今回、簡単なギンムクドリの観察記録を報告することとした。

#### 観察方法

##### 1. ギンムクドリの観察環境

###### 1) 餌台の設置状況

餌台は、札幌市中央区の筆者宅の庭に、10年程前から積雪期 (12月~4月) のみ毎年設置しているものであり、主としてこ

の時期近隣で目にする冬鳥の観察用である。周囲の環境は、近くに山があり、比較的緑が多い住宅地である。庭には、毎年多くの野鳥が訪れる。スズメ、ヒヨドリ、ヤマガラス、シジュウカラ、ハシブトガラ・ハクセキレイは一年を通じて観察される他、12~4月にかけては、ゴジュウカラ、カワラヒワ、アトリ、ハギマシコ、シメ、ムクドリ、エゾアカゲラ、キレンジャク、ヒレンジャク、ツグミ等もほぼ毎日訪れる。また、5~6月にかけては、アオジやコムクドリも定期的に姿を見せる。なお、2010年3月には、マミチャジナイ (♀) 1羽も数日間姿を見せた。

餌台は、全部で3箇所に設置した。1階南側の出窓の直前にあるエゴノキの高さ1.5mの枝に、出窓から1.5m離して浅い竹籠製の餌台を1基設置した (餌台A, 20×15cm)。また、この餌台の更に南側3.5m (出窓からは5m南側)、高さ1mの所に、植木鉢の水盤を利用した餌台を1基設置した (餌台B, 直径: 30cm)。更に、家の東側3mの所には、線路の枕木 (高さ1~2m) 3本を組合わせて埋め込んで作った餌台 (餌台C, 20×15cm, 枕木の側面の隙間もクルミ等の“餌入れ”として利用) を設置した。

2011年2月26日 受理

キーワード: ギンムクドリ、観察記録、厳冬期、積雪期、札幌市、滞在

## 2) 給餌内容

餌台 A 及び B に、リンゴ（頂部付近に窪みをつけて、ハチミツを添加）、ミカン、バナナ（中央部分に浅い溝を掘り、ハチミツを添加）等の果物、パン屑を、餌台 C に牛脂、クルミの実、ヒマワリの種、アサの実、各種穀類をそれぞれ毎日、夜間に任意の量を給餌した。

## 3) 餌台周囲の庭の状況

庭の木は全て落葉樹であり、ヤマボウシ、コムラサキシキブ、ウメモドキ、ガマズミ、ヤマブドウ、アケビ、エゴノキ、サルナシ（コクワ）、ジュンベリー、ブルーベリー、ハスカップ等、野鳥の餌となる実の生る木を中心に植えている（合計約 40 本）。樹高は、概ね 1~4 m である。一年を通じて、多くの野鳥の休み場所、及び見張り台となっている。

## 2. ギンムクドリの観察状況

### 1) 観察期間

次の 2 期間に渡って観察を行った；第 1 回目観察期間：2009 年 3 月 3 日（火）~3 月 15 日（日）、第 2 回目観察期間：2010 年 1 月 15 日（金）~1 月 27 日（水）。なお、両期間中の積雪は、1 m 未満であった。

### 2) 観察方法

1 階南側の出窓（餌台 A 及び B）、及び 1 階の東側の窓（餌台 C）より、主として肉眼及び双眼鏡で観察した。観察時間帯は、筆者の場合、平日は 06:30~08:00、その他の日は概ね 07:30~16:00 の間であった。筆者が不在の時間帯は、家族が観察した。また、

写真はデジタルカメラを使用し、消灯した室内から出窓越しに望遠モードで撮影した（フラッシュは使用せず）。

## 結果

### 1. 第 1 回目観察状況（2009 年）

2009 年 3 月 3 日（火）の 07:00 頃、突然餌台 A に 1 羽のムクドリ大で、赤い嘴で頭部が白く、首から後方が青灰色で、翼と尾が黒く、初列風切羽基部に白斑がある鳥が姿を見せ、リンゴを食べ始めた。その時点ではカメラの用意がなく、体形や羽の特徴をスケッチした。当初はムクドリのアルビノ个体かと思ったが、野鳥図鑑（日本の野鳥山溪ハンディ図鑑 7（2009）、決定版日本の野鳥 590（2008）、日本の鳥 550 山野の鳥 増補改定版（2008））と照合した結果、ギンムクドリ（♂）であることが判明した。翌日以降も大体同じ時刻に庭に姿を見せるようになったため、行動観察と写真撮影に努めた（図 1）。観察期間中の行動の特徴としては、以下のようなものがあった。

1) 単独で行動し、ムクドリの群れとも別行動であった。ムクドリやヒヨドリ等が近づくと大きく嘴を開けて威嚇（この時、鳴き声は発しなかった）し、餌を独占する傾向が強かった。木にとまる時も、他の野鳥とはやや距離を置くようにしていた。餌台 A 及び B における餌の独占傾向の強さの順位は、ギンムクドリ > ムクドリ > ヒヨドリ > ツグミ、の順であるように思われた。なお、レンジャク類との力関係は、両者が居合わせる場面を観察していないので、不明であっ

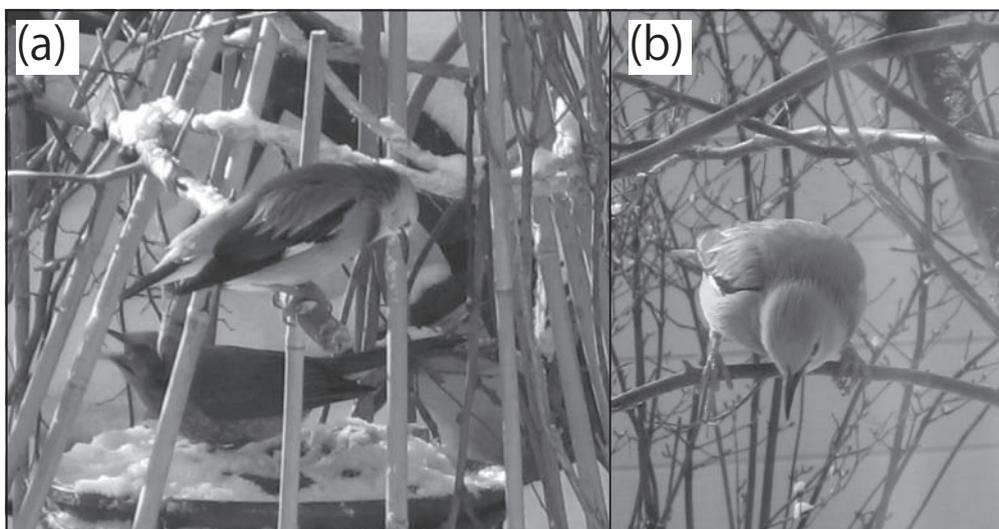


図1. a: 餌台Bでバナナを食べているヒヨドリを、これから追出そうとするギンムクドリ（2009年3月11日撮影）。b: 餌台Aが設置されたエゴノキの枝（餌台の約30 cm上方）にとまって、餌台に移る前に周囲の様子を注意深く覗うギンムクドリ（2009年3月15日撮影）。

た。

2) リンゴ、バナナ、ミカン、パン屑を食べる場面は頻繁に観察され、特にリンゴを最も好むようであった。一方、ムクドリ等とは異なり、牛脂やクルミの実には関心が薄いように思われた（餌台A及びBにのみに立ち寄った）。また、ヒヨドリが頻繁についばむガマズミの実を食べる場面は、ムクドリの場合と同様に観察されなかった。

3) 警戒心は極めて強く、観察時に、消灯した屋内で少しカメラを動かしたり、フラッシュを使用したりすると、飛び去ることが多かった。

4) 餌台に来る前には、必ずサルナシの木(高さ4 m, 餌台Aから6 m, 餌台Bから5 m, 餌台Cから7 mの距離)の頂部付近に止まって周囲を警戒し、安全を確認してから餌台

に飛来した（しばしばネコが徘徊し、ツグミが捕獲されることがある）。

5) 樹上もしくは隣家の屋根の上で、しばしば雪を口にしたり、羽繕いを行った。

6) ムクドリとは異なり、周囲を警戒してか、地面（雪面）には降りなかった。

7) 1日に、朝（7:00頃）、昼（12:00頃）、夕方（16:00頃）の少なくとも3回以上は庭へ飛来してきた。滞在時間はいずれも10~15分間程度であった。

8) 餌台への最初の飛来から10日程過ぎた頃より、1日当りの飛来回数は減り、庭の木には来ても、餌台にはあまり近づかなくなった。また、滞在時間も5分間程度と短くなり、暫く木の上において、そのまま飛び去ることが多くなっていった。3月15日（日）の昼頃、サルナシの木の頂部付近にい

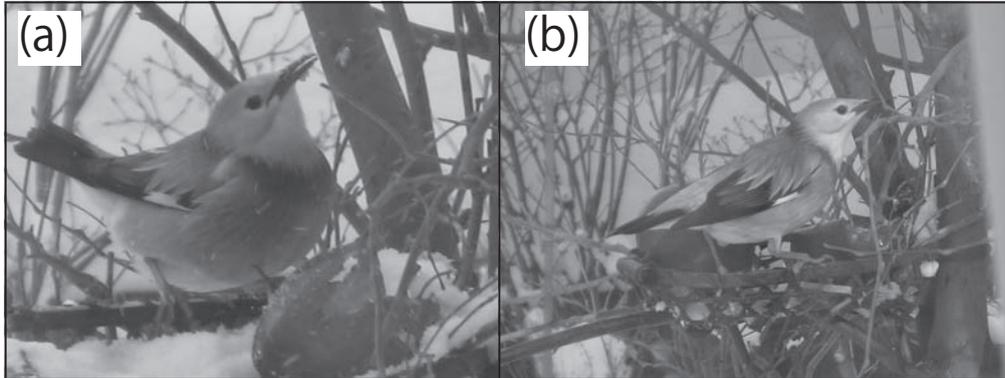


図2 a: 粉雪が舞う中、餌台Aでリンゴを食べるギンムクドリ（2010年1月16日撮影）。b: 雪の晴天、餌台Aでリンゴをついばむ前に、周囲を警戒するギンムクドリ（2010年1月17日撮影）。

るところを確認したのを最後に、翌日以降の庭への飛来は途絶えた。

## 2. 第2回目観察状況（2010年）

“迷鳥”であるならば、再び当地へ飛来して来る可能性はかなり低いであろう、と思われたギンムクドリであったが、昨年よりも1ヶ月半程早い1月15日（金）の07:00頃に再び筆者宅の庭に1羽（♂）が姿を現し、餌台A及びBで、リンゴやバナナ等を食べているところを目撃した。しかし、昨年確認した個体と同一個体であるかどうかの判断はできなかった（図2）。

以後、1月27日（水）の観察記録を最後に立ち去るまでの行動は、2009年時とほぼ同様であり、最初の飛来確認から2週間程で庭への飛来は途絶えた。なお、2010年は前年とは異なり、樹上で休む時には、特に争わずにムクドリの群れと数メートルの距離を置いて混在する場面を複数回観察した。

## 考察

第1回目の観察期間中、自分が所属している日本野鳥の会には当地へのギンムクドリ飛来の簡単な経緯を写真と共に報告した他、ギンムクドリの飼育記録等についても問合せたが、“籠逃げ”の可能性はほぼ否定できる、との回答を得た。従って、このギンムクドリは、“迷鳥”である可能性があるものと思われた。

我が国では、ギンムクドリの比較的長期に渡る観察記録は、高知県（2009年5~6月）において報告があるが（木村ほか2010）、ギンムクドリの冬期（積雪は無し）における行動については、2002年12月の島根県、2003年1月の鳥取県、2005年1~2月、及び2006年12月の石川県、2007年1月の千葉県等ごく短期間の観察記録が報告されているのみである（平田2010）。また、北海道においては、2006年~2009年の渡りの時季に、礼文島（宮本2006）、

浦幌町（日本野鳥の会十勝支部 2010a, b, 浦幌町野鳥倶楽部 2009), 利尻島（佐藤ほか 2009), 天売島（石川隆史, 私信）等での一過性の数日間の観察記録があるに過ぎない。その他の情報を調査しても、本道においては、厳冬期の積雪期における中～長期間に渡るギンムクドリの観察記録は、これまでまだ報告されていないと思われる（佐竹 2004, 藤巻 2010, 石狩鳥類研究会 2009, 日本野鳥の会オホーツク支部 2010）。なお、国後島等の北方四島（南千島）においても、観察記録は報告されていない（ネチャエフ・藤巻 1994）。

近年、大韓民国の済州島でギンムクドリの繁殖が確認されており（Kim *et al.* 2007), 繁殖地域の北上傾向が報告されているが、このことと今回の札幌市中央区における観察記録との因果関係については不明である。しかし、厳寒の積雪期であっても、北海道内の同一地域内に一定期間（約 2 週間）滞在する個体が存在することが、今回の観察から確認された。

なお、2009 年と 2010 年に観察した個体が同一個体であるかどうかは不明であったが、いずれも積雪期においてもムクドリ等と同様に活発に活動する状況が観察されたことから、その後そのまま国内（北海道内）に居着いた可能性も想定されよう。また、地球温暖化等の影響については不明ではあるが、大陸から北海道への細々とした不定期な飛来ルートが既に存在し、実際には複数個体（今回、一度に観察できたのは 1 羽であったが）が飛来してきている可能性もあると思われる。いずれにせよ、

単なる“迷鳥”扱いとしての一観察記録で終わらせず、ギンムクドリの分布域の変化等について今後検討していく上でも、今後も各地域における詳細な観察記録を増やし、気候の変化の記録等と併せてデータの蓄積していくことが肝要であると考える。

#### 謝辞

本稿の作成にあたり、多大なご協力をいただいた北海道大学大学院水産科学院資源生態学領域の平田和彦氏に、心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 藤巻裕蔵. 2010. 北海道鳥類目録 改定 3 版. 極東研究会, 美唄市.
- 平田和彦. 2010. 滋賀県高島市における積雪期のギンムクドリ *Sturnus sericeus* の記録. 日鳥学誌. 59: 61-64.
- 石狩鳥類研究会. 2009. 石狩支庁管内野鳥年次記録 (1997~2009). 石狩鳥類研究会, 札幌市.
- 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄. 2009. 日本の野鳥 山溪ハンディ図鑑 7. (株)山と溪谷社, 東京.
- Kim, E. M. & Choi, C. Y. 2007. First Breeding Record of the Red-billed Starling (*Sturnus sericeus*) in Korea. 韓国鳥学会誌 14: 153-156.
- 真木広造・大西敏一. 2008. 決定版 日本の野鳥 590. (株)平凡社, 東京.
- 宮本誠一郎. 2006. 礼文島におけるギンムクドリとチゴモズの記録. 北海道野鳥だより 146: 6-7.
- ネチャエフ, V. A.・藤巻 裕蔵. 1994. 南千島鳥類目録. 北海道大学出版, 札幌市.
- 日本野鳥の会オホーツク支部. 2010. オホーツク圏鳥類目録. (財)日本野鳥の会オホーツク支部, 北見市.
- 日本野鳥の会十勝支部. 2010a. 北海道東部鳥類目録. (財)日本野鳥の会十勝支部, 帯広市.
- 日本野鳥の会十勝支部. 2010b. 十勝管内鳥類目録.

- (財)日本野鳥の会十勝支部, 帯広市.
- 佐田正行. 2004. 日高山脈(北部・中部)鳥類調査報告  
. (株)広報社印刷, 札幌市.
- 佐藤重穂・木村 宏・平田 幸・岡井 義明. 2010. 高  
知県宿毛市におけるムクドリとギンムクドリ  
の異種間つがいによる繁殖事例. 日鳥学誌. 9:  
76-79.
- 佐藤雅彦・小林信光・佐藤里恵・田牧和広・小杉和  
樹. 2009. 利尻島において観察されたムクドリ  
科3種の記録. 利尻研究 28: 15-17.
- 浦幌町野鳥倶楽部. 2009. 浦幌町鳥類目録 第2版.  
浦幌町野鳥倶楽部, 浦幌町.
- 山形則男・吉野俊幸・五百沢日丸. 2008. 日本の鳥  
550 (山野の鳥) 増補改定版. (株)文一総合出  
版, 東京.

### Records of Silky Starling *Sturnus sericeus* at Sapporo in winter 2009 and 2010

Toshihiko Izumi

Hokkaido institute of public health, North 19, West 12, North Ward, Sapporo, 060-0913 Hokkaido, Japan